



Title	今古文經學に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	吉田, 勉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14571号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81443
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tsutomu_Yoshida_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 吉 田 勉

学位論文題名

今古文經學に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、中國清末における今文經學を中心に据えて、今文學の發展史、今古文經學の相違點、ならびに具體的な經書解釋のあり方に關する考究を目的としたものである。具體的には、清代の今文學者が「微言大義」の發揮に努めた點に着目し、その定義として最も一般的とされる皮錫瑞（1850～1908）の説をとりあげ、同説の成立した經緯に對する検討を行うとともに、それに先立つ宋翔鳳（1777～1860）に注目して、「微言大義」の語との關聯から今文學に果たした役割について考察を加え、さらに廖平（1852～1932）の『今古學考』ならびに『穀梁古義疏』について、各方面から主張背景を探究することを通して、その今古文經學史觀がどのように應用されたかを明らかにしている。

・本論文の内容

序章では、本研究の目的と背景、本研究の方法、その構成について、簡潔に記述する。

第一章「皮錫瑞の「微言大義」言説」では、清代末期に活躍した皮錫瑞の「微言大義」説をとりあげ、同説の成立した經緯について考察する。清代の今文學者は、専ら「微言大義」なるものの闡明に努めたとされ、この「微言大義」に對する定義として、しばしば公約數的に援用されるのが、皮錫瑞の『經學通論』に見える説である。皮錫瑞は『孟子』の記述を根據として『春秋』の「微言大義」に對する定義を下すのだが、かかる定義の背景には、彼の生きた清末の湖南という独自の時間的・空間的理由が存在すると想定される。それを踏まえて、皮錫瑞の日記等への詳細な考察を通して、上述の定義が、湖南省長沙における梁啓超との交流や葉德輝との論難を通じて形成されたことを解き明かした。さらに、今文學者が廣く群經に「微言大義」の存在を主張したことを確認するとともに、皮錫瑞もその系譜上に位置づけられることを指摘し、加えて皮錫瑞の説が群經の中でも特に『春秋』を對象としたものであることを論證した。あわせて「微言大義」の語に着目した今文學者に對する研究の必要性と有効性についても言及している。

第二章「宋翔鳳『論語說義』の微言說」では、清代中期の今文學派として知られる宋翔鳳の『論語說義』をとりあげ、その「微言」説について考察する。宋翔鳳も、皮錫瑞と同様に『論語』の記述によりつつ「微言大義」に對する定義を下したが、彼はまた考證學の方法も修得したとされ、考證學と今文學との雙方に通曉した點に、その學術の特徴があるといわれる。そこで、主に宋翔鳳『論語說義』に基づきながら考察し、また「微言」に對する定義を整理することによって、それが考證學者の惠棟や錢大昕の説に基づいていることを明らかにした。このことは、宋翔鳳の學術の特徴が、その「微言」説にも現われていることの證左といえる。さらに、今文學における「微言大義」の學の發展史という視點から、宋翔鳳は考證學者たちの萌芽的な「微言」説を今文學の體系中にとりこみ、それ以後の今文學者における「微言大義」説に發展の契機を與えたことを論證した。

第三章「廖平の今古學と『春秋穀梁傳』」では、清末の學者、廖平の代表的著作である『今古學考』および『穀梁古義疏』に對して考察する。まず『今古學考』は、廖平が禮制により經書の今古文を分類した書として知られ、同書では春秋三傳のうち『穀梁傳』が特に高く位置づけられていることを確認する。その上で、廖平が『今古學考』と前後して著した『穀梁古義疏』をも考察對象

とする。ちなみに『穀梁古義疏』は『穀梁傳』に對して廖平が注釋を施した著述である。かように廖平の『今古學考』と『穀梁古義疏』とに依據しながら、彼が『穀梁傳』を評價した背景を探るとともに、『穀梁傳』の成立・傳承に對する独自の説を整理することを通して、その總體的な『穀梁傳』觀の解明を試みた。その結果、『今古學考』によれば、今學の禮制とは孔子が晩年に定めたものであり、それは『禮記』王制篇に遺されていることを明らかにするとともに、群經中の禮制のうち『穀梁傳』の禮制が最もそれに合致することから、同書は孔子晩年の理想を伝える書として高く評價されていたことを證明した。また、この評價は『穀梁傳』の成立・傳承に對する『穀梁古義疏』における説とも大いに關わり、廖平の『穀梁傳』觀の基礎を成していることにも論及している。

第四章「廖平の『穀梁傳』解釋—その舊注批判と劉向説の引用をめぐる—」では、前章の検討内容を踏まえて、廖平の舊注批判に關して、さらなる考察を行う。具體的には、廖平が『今古學考』において『禮記』王制篇と『穀梁傳』との合致を説いたのを受け、兩書の代表的注釋者である後漢の鄭玄や東晉の范甯は、このことを知らずに經書の今文古文を混同したと批判したこと、それ以前の劉向を代表とする漢人の説によって『穀梁傳』を解釋し直すべきと主張したことを具體的に検討している。また、これら舊注批判と劉向説の引用とについて考察を加えることによって、『穀梁古義疏』に展開されている廖平の『穀梁傳』解釋の特徴を解明している。このうち、舊注批判の根據は、王制篇と『穀梁傳』の禮制とが合致するという自説であり、廖平はこれに反する讀み方をする鄭玄・范甯の説を斥ける一方で、兩書の記述を對應させながら傳文の意味を確定したことを論證した。また、劉向の説は、上記の自説やそれを應用した傳文解釋を補足し、立證するために引用されていることについても言及している。これらを踏まえて、廖平の『穀梁傳』解釋は『今古學考』に述べられている自身の學説を背景として、それを一貫させたものであると結論づけている。

終章では、本研究における各章の要點と結論をまとめるとともに、研究全體の成果について記述する。